

Joseph Conrad : *Under Western Eyes* 試論

三 輪 誠 一

1

Conrad の長編小説のうち、political novel と呼ばれる三つの作品群がある。

Nostromo (1904), *The Secret Agent* (1907), *Under Western Eyes* (1911) の三作品である。このうち、私のもっとも興味を感ずるのは、最後の *Under Western Eyes* である。これらの作品のうち、どれが最もすぐれた作品であるかは、批評家によってその評価はさまざまである。私はこれらの作品群中 *Under Western Eyes* を第一位にあげて考察の対象としたい。これら三編の小説はいずれも政治の世界を描いているが、*Under Western Eyes* においては政治は小説の背景に用いられているだけで、重点はもっぱら主人公個人の内部世界の描写である。この小説の焦点は主人公 Razumov の心理的葛藤の追跡と分析にしばられている。またこの作品は小説技法の重要問題を提供する。以上が私がこの作品をとりあげた理由である。

2

私はまずこの作品の構成上の特異点から考察をはじめたい。Conrad が「私」という一人称の語り手をしばしば用いていることは、彼の読者のよく知る所である。周知のように彼の作品、*Lord Jim* (1900) *Youth* (1902), *Heart of Darkness* (1902) はいずれも Marlow と呼ばれる元船長が過去に遭遇した事件や人物を、「私」という語り手となって物語る形式の小説作品である。*Under Western Eyes* にも「私」という語り手が登場す

る。しかしこの小説において Conrad が語り手として設定したのは Marlow ではない。これはこの小説が上記の三つの小説とは制作意図や題材において大いに異なるからである。この小説の語り手となるためには、Marlow におけるような永年の海上生活の経歴は不要不適當である。この小説の語り手となるためには、スイスの Geneva における永年の居住者、ヨーロッパ各国語に通じる老語学教師という資格（特にロシア語をよく解さなければならぬ。）が必要になる。これについての説明は Conrad が1920年にこの作品のために書いた note を読むのが早道である。彼はこの note の中に彼の創作意図と物語の構成方法を書いている。私はその要点を原文の中から引用することにする。彼はまず彼の意図を “an attempt to render not so much the political state as the psychology of Russia itself” と要約する。次に彼が創作にあたって配慮した事項を説明する。 “My greatest anxiety was in being able to strike and sustain the note of scrupulous impartiality. The obligation of absolute fairness was imposed on me historically and hereditarily, by the peculiar experience of race and family, ……” 上記の peculiar experience とはもちろん亡国ポーランドの民族独立運動に生涯を過した彼の家族が、帝政ロシアの苛酷な圧制の下で受けた受難の歴史を指すものである。次に彼は小説の登場人物と物語の語り手についての作者の主要関心事をのべる。 “What I was concerned with mainly was the aspect, the character and the fate of the individuals as they appeared to the Western Eyes of the old teacher of languages.” Conrad が Geneva に住む一人の老英人語学教師をこの物語の語り手とし

て設定したことについては、今日まで幾人かの批評家が各人各様の意見を述べているが、これについては、改めて後で詳しく言及することにする。Conrad はさらに語を次いでこの語り手について説明する。“He was useful to me and therefore I think that he must be useful to the reader both in the way of comment and by the part he plays in the development of the story.” さらに作者はこの語り手の存在は “the effect of actuality” を与えるために必要な “an eye-witness of the transactions in Geneva” であると言う。次に作者は小説の主人公 Razumov の性格を簡単に説明する。“He is an ordinary young man with a healthy capacity for work and sane ambitions. He has an average conscience.” このきわめて平凡な大学生（ペテルスブルグ大学哲学科の三年生）の運命を，“The sanguinary futility of the crimes and the sacrifices seething in that amorphous mass envelops and crushes him.” と述べる。以上が作者の note からの簡単な抜粋である。

この作品は四部より成り、小説の第一部の背景は帝政ロシアの首都ペテルスブルグであり、第二部以下はスイスの小都市 Geneva がその背景となる。第一部の序章は語り手 “the old teacher of languages” の自己紹介で始まる。“To begin with I wish to disclaim the possession of those high gifts of imagination and expression which would have enabled my pen to create for the reader the personality of the man who called himself after the Russian custom, Cyril son of Isidor—Kirylo Sidrovitch—Razumov.” さらに語り手は語りつづけて，“I have been for many years a teacher of languages. It is an occupation which at length becomes fatal to whatever share of imagination, observation, and insight an ordinary person may be heir to.” この語り手が彼の想像力、観察力、表現力の貧困について語る言葉は、余りにも謙虚に過ぎるが、読者はこの作品を読み終わった時、彼の語る物語の与える印象の鮮烈さに驚くにちがいない。ある批評家は、この語り手の自分の能力にかんする自己評価の記述は不要であると言う。この無名の老教師を

Marlow と比較する時、両者の経歴、性格、能力の相異は大きい、この語り手は読者のためには語り手としての職能を十分に果していると思ふ。

この物語を展開するにあたり、Conrad がこの語り手をいかように利用したかを、ここで説明しておきたい。語り手は主人公 Razumov との対話、重要場面における登場を通して主人公を観察するだけでなく、主人公の残した日記と手記を入手する。このことは小説第一部第一章の中で述べられる。（日記と手記の入手のいきさつは第四部の最終章で明かにされる。）語り手は上記の体験や資料にもとづいて物語を展開する。この小説の構成をさらに具体的に説明すると次のようになる。第一部に描かれる事件はペテルスブルグで起きるので語り手はこれを見ることも聞くこともできない。したがって第一部は全知の作者（omniscient author）によって叙述される通常の物語形式をとる。ペテルスブルグ大学生 Victor Haldin によって行われた帝政ロシア政府の高官の爆弾による暗殺事件は全く客観的に描写されている。次に暗殺犯人の Haldin が友人 Razumov をその下宿に訪れて、暫時の保護と国外逃亡の援助を依頼するきわめて重要な場面の描写がある。ここで Razumov は彼の将来の運命にかかわる重大な選択を迫られる。彼の狼狽と恐怖と苦悶は、二人の対話、主人公の内的独白をまじえた心理描写によって詳細に描き出される。結局 Razumov は友人 Haldin を密告することによって裏切ることとなる。二人の関係は同じ大学で講義を聞く際に稀に顔を合わせる程度の浅いもので、思想的には共通のものはなく、主人公は孤独で温良、勤勉な学生であり、Haldin は過激な学生革命家である。Razumov は政治には何等の偏向ももたない学生であるが、学友間では信頼するに足る性格の持主として高く評価されている。この美德が皮肉にも Haldin が彼に救助を依頼する理由となったのである。ここから Razumov の破滅の運命への第一歩が始まる。密告という彼の裏切りの行為は彼をロシア秘密警察のスパイとならざるを得ない破目におとし入れ、彼をスイスの Geneva へ向わせる。以上でこの小説の第一部は終り、第二部以下の諸事件はすべて Geneva で起り、その叙述形式も変るこ

ととなる。この後、小説に登場する諸人物、彼らの遭遇する諸事件は一人称の語り手によって順次語られることとなる。

3

当時 Geneva はロシアの亡命革命家の一団の住む西欧の都市の一つであった。このほかにも Geneva には多数の一般ロシア人が居住しており、その居住地は Little Russia と呼ばれる。Haldin の母と、彼の妹 Natalia はすでにロシアを去ってこの地区に移り住んでいる。語り手の老人教師は以前から Natalia のために英文学の個人指導を依頼されており、Haldin 母子の住むアパートをしばしば訪れ、彼女等とはすでに親しい間柄となっている。一方 Razumov はペテルスブルグにおいて Haldin の親しい学友、革命運動の同志であったという仮面の下に亡命革命家たちに迎えられて Geneva に来り住み、ある機会に Haldin 母子および語り手と相知ることとなる。語り手はたまたま彼の購読する英国新聞が、ペテルスブルグで起きた政府要人の暗殺事件、その犯人の大学生の氏名、犯人の処刑を報道しているのを読む。このことは語り手によって Natalia にも伝えられる。Razumov のもっとも恐れるのは彼の裏切り行為の発覚である。たまたま彼はすでに面識のある女性革命家と面談する機会をもち、彼女からペテルスブルグで起きた Haldin と知合のある男の不可解な自殺事件を聞く。女性革命家は彼女の推測判断としてこの自殺はその男が Haldin を密告した行為を悔い、自責の念に苦しんだ結果であると説明する。(女性革命家は Sophia Antonovna と呼ばれ、登場の回数は少ないが、この作品の中では重要人物で、彼女については後に詳しく触れる予定である。)彼女のこの説明は Razumov の身の安全を保証するものとなる。彼はその行為の秘密のもれる危険から解放されたのである。彼のそれまでの内心の不安とは逆に彼は Natalia から亡兄の親友として絶対的な信頼と尊敬と、さらに深い愛情を受けるといふ、彼の全く予期しなかった皮肉の運命にめぐりあう。彼の眼前にあらわれた外部世界は明るく、かつ安全になったはずである。しかし彼の内部は新しい恐怖と悔恨にみちた暗黒世界と

なる。小説の第二部以下第四部終章の Razumov の告白の場面に至るまで、この長編は Razumov の内部世界の苛烈の葛藤を描いた物語である。語り手は小説が第二部に入ると、事件や人物の目撃者、観察者であると同時に登場人物の一人として行動する二重の役割を与えられる。

4

私はここで作者の設定した語り手にかんするいくつかの批評を紹介したい。ある批評家は作者のこの語り手の設定を肯定し、また他の批評家は否定的の見解を表明する。たとえば、E・Crankshaw のいう所を聞いてみよう。“Here the narrator is not Marlow but his first cousin, a shore-going teacher of languages. And to me this book seems to fail because that school master is never made convincing as Marlow is always made convincing. He is too plainly, as Marlow never is, a device,……”

C. B Cox によれば次の批評となる。

“Conrad’s use of the English teacher as narrator is a most unsatisfactory device. This is partly a technical weakness.”

Cox はさらに次のような手きびしい批評を加える。

“His [the narrator’s] presence during the confession scene between Razumov and Natalia is embarrassing, as if he were a voyeur peeping in at this scene of torment.”

これは両人物の最後の対面場面であり、語り手もここに登場し、終始二人の言動をみまもる。これはこの物語の中で読者にもっとも強烈な劇的緊張を与える箇所である。読者は二人の人物の凄烈な激情の描出を息づまる思いで読むはずである。この告白場面の印象は語り手の存在を読者に忘れさせるほどに鮮烈である。Cox の批評は私にはやや的をはずれた酷評に思われる。

次に私は上記二人の批評家の見解とはややニュアンスの異なる Albert Guerard の批評の大要を述べよう。

“…… this vivid and violent drama is (for Gonrad’s imagination) in the past. But it is the

narrator's function as obtuse participant and observer to give from page 100 on, a strong sense that we are in a fictional present time:"

(from page 100 on は小説の第二部以下終章までを指す。) Guerard によれば、この小説の語り手は読者を "experiencing life directly in a fictional present" という心理状態にみちびく役割を果しているという。Cox は語り手を "a voyeur peeping in" にたとえて酷評したが、Guerard の批評はこれと全く対立する。それはまた「小説的現在時」という小説美学における重要問題の提言でもある。Guerard の見解にしたがえば、"The last interview of Razumov and Natalia Haldin is, as much as any scene in fiction, happening 'now'. And for the reader watching that scene the narrator's presence may seem unimportant; may even be forgotten." 即ちこの場面において語り手の姿は読者の視野から消え、その後には Razumov と Natalia の映像だけが鮮かに残るといっているのである。

読者は "the illusion of presentness" と "dramatic immediacy" の効果が作者慣用の技法によってここに見事に実現されているのを見る。

5

先に引用した作者の note 中の語句が示すように、この作品の創作にあたり、彼は常に "impartiality" "absolute fairness" を彼の創作態度とした。同じ note の中で彼は次のようにもいう。"I had never been called before to a greater effort of detachment : detachment from all passions, prejudices and even from personal memories." しかし彼の努力にもかかわらず、彼の detached attitude は批評家には十分に理解されなかったようである。文学作品は必ずしも常に作者の欲するよう理解されるとは限らないのである。同時代の知名の批評家の一人、Edward Garnett の場合をその一例としてここに示す。Garnett はこの作品が1911年に発表された時、Conrad は作者の憎悪の感情をこの作品にもりこんだと解し、怒りと非難の手紙を作者に送った。この手紙の所在は今日まで不明のままであるが、

これに対する Conrad の弁明の手紙が現存するので、これによって Garnett の手紙の趣旨は大体推測されている。当時 Garnett はロシアの革命家たちへの sympathizer として知られており、亡命革命家の中に幾人かの友人をもっていた。彼はこれらの友人が作中人物のモデルとして使用され、かつ作者によって嘲笑されていると感じたのである。(この時以来 Garnett の Conrad に対する友情は次第に冷却し、Conrad もまた彼を支持する若い世代の中に新しい友人を求めることになる。)しかしこの時より25年後、1936年 (Conrad の没後12年) Garnett は *Conrad's Prefaces to his Works* のために introduction を書き、その中で作者に対するかつての非難を取消して次のように述べている。"I unjustly charged Conrad with putting hatred into the book and after re-reading the story twenty-five years later, I own I was wrong."

Under Western Eyes は発表時においては一般に不評であり、失敗作とみなされた。それが再吟味され、正しく評価されるまでにはかなりの年数を要した。彼の初期および晩年十年間に書かれた作品は比較的広く読まれたが、*Under Western Eyes* を含む中期の作品は失敗作とされ、読まれることのもっとも少なかった作品群である。なお Garnett は上記の Conrad への手紙の直後、*Under Western Eyes* の批評を週刊誌 *The Nation* (Oct. 21, 1911) に発表している。それは Conrad への非難の私信から推測されるような烈しい否定的の批評ではなく、意外にも冷静で穏当な内容のものである。彼はこの作品の中に描かれた革命家たちの人間像を "corrosively bitter etching of types of the revolutionary party" と評すると同時に、他方ではこれら革命家の中の唯一の女性革命家 Sophia Antonovna の性格描写については好意的の批評を下して次のように述べる。"the author introduced into the group [of revolutionists] the admirable figure of Sophia Antonovna, a woman Nihilist of the old school, who recalls the heroines of the early 'eighties." Garnett はもし作者がこの女性を作品中に登場させなかったら、この小説は "the merciless picture" であり、それは "vindictive art" と思われるだろ

うという。Norman Sherry はこの「復讐の芸術」という語句が Garnett のこの小説の読後の実感だろうと言う。

次にもう一人の同時代人、Ford Madox Ford (1873—1939) の批評を読んでみよう。これは Garnett の批評よりも少しおくれて、雑誌 *The English Review* (Dec. 1911—March, 1912) に連載されたものである。Ford は詩人、批評家を兼ねた小説家であり、1903年には小説 *Romance* を Conrad と共作している。両者の親密な間柄を一応考慮にいれても、人間および芸術家としての Conrad を熟知する人として、彼の批評は友人の作品に対する単なる賛辞ではなく、共作の経験をふまえながら、詳細かつ適切にこの作品を分析する。Ford はまず Conrad の人と作品の総括的な印象を次のように述べる。

“……I have thought very often that Conrad is an Elizabethan. … For when we think of the works of the Elizabethans other than Shakespeare, we seem to see a darkness — a darkness of forests illuminated by torches and when I think of the work of this author I always have the same image.” Ford はさらに続けて、Conrad が常に抱きつづけた image として “darkness, death, destiny, honour の四つをあげ、Conrad と Elizabethans とを別つものを次のように説明する。

“It is here that Conrad differentiates himself from the Elizabethans, … They could, as it were, have conceived a Judas and even the remorse of such an Iscariot, … But they could not prize honour quite so high,”

Ford は Conrad の罪についての考え方を次のように要約する。‘If you sin, you must pay for it.’ ‘Be sure your sin shall find you out.’ そして Razumov の背信の罪と、告白の決意に至るまでの彼の恐怖と悔恨の心理描写をもって一編の小説を構成した Conrad を “a deeply religious writer” と呼ぶ。

芸術と道徳との関係につき、“every work of true art must have a profound moral significance” という信念をもつ Ford は moralist と moralizer を峻別して次のように言う。“…… the

artist drawing life, somber more or less to its latitude, is the true, is the only moralist. All the rest are only moralizer: they say what they like, not what is.” Ford は Conrad の芸術の中に人生の真実と人間の moral を探索する realist と moralist をみたのである。

なおここで Razumov の最終的な運命について簡単な説明を加えた後、Sophia Antonovna について記述したい。Razumov は Natalia への告白の後、直に彼の宿舎に帰り、彼の最後の手記を書く。そしてその夜おそく革命家たちの集会へ出かけ、こゝでも一切を告白する。この時、彼らの中にいるもっとも卑劣な人物、二重スパイの Nikita によって恐しいリンチを受けて重傷を負う。(彼は両耳の鼓膜を破られる。)しかしこの時はじめて彼の心には平和がよみがえる。彼は不具者となってロシアに帰り、田舎に退いて敗残の余生を送ることとなる。この事件の約2年後、ひそかにロシアに帰っていた Antonovna は同じくロシアに帰っている Natalia から老教師への伝言を依頼されて再び Geneva を訪れて老教師に会う。この小説の結末は老教師と Antonovna との対話をもって幕を閉じる。Antonovna は老教師が Razumov の日記と手記を持っていることに興味を感じ、それを読ませてもらう。それを読み終ると彼女は Natalia の近況、Razumov の田舎の住居への訪問、この時 Razumov が自ら話したリンチ事件の詳細等を語り手に伝える。先に引用した Garnett の批評の中にも見える通り、この grey-haired lady, Antonovna はこの小説の登場人物中、読者が好意をもってみることのできる唯一の人物である。作者は Razumov の人物とその行動と動機を説明する役割を彼女に与える。この役割を果し得るのは聡明で理知的な彼女以外には誰もいないからである。彼女は物語の中では登場回数のかきめて少い脇役であるが、物語に終止符を打つのは彼女である。少し長くなるが次に Antonovna の言葉の一部を引用する。“… There are evil moments in every life. A false suggestion enters one’s brain, and then fear is born — fear of oneself, fear for oneself. Or else a false courage — who knows? … but tell me, how many of them would deliver themselves up deliberately

to perdition …… rather than go on living, secretly debased in their own eyes? … And please mark this — he was safe when he did it. It was just when he believed himself safe and more — infinite more — when the possibility of being loved by that admirable girl [Natalia] first dawned upon him, that he discovered that his bitterest railings, the worst wickedness, the devil work of his hate and pride, could never cover up the ignomy of the existence before him. There's character in such a discovery.” 上記の引用は、Razumov の背信行為とその後の彼の心理的葛藤、彼の廉恥心の回復、最終的な告白の決意を簡潔に説明するものである。Antonovna は Razumov が最後に彼の人格の尊厳を取りもどしたことを認めたのである。語り手は彼自身を “a mute witness of things Russian, unrolling their Eastern logic under my Western eyes” と呼ぶように、彼には Razumov の心理と言動は謎であったが、Antonovna の言葉によってはじめてそれを理解することができたのである。

6

Conrad は1920年に彼の短篇集の一つ *'Twixt Land and Sea* に付した author's note の中で “……there is no denying the fact that *Under Western Eyes* found no favour in the public eyes,” と言っているが、この長編小説は発表当時、批評家の間で必ずしも無視されたわけではなく、かなりの反響を呼びおこし、これを論ずる批評はいくつかあった。しかしそのすべてが必ずしも作者の期待したような理解を示したわけでもなかった。好意的、肯定的の批評であっても、作者の重要な創作意図を見落とし、あるいは見誤ったものもあった。例えば次のような批評である。
“Under Western Eyes becomes an explanation of the works of Russian novelists: it helps us to understand Turgenev and Dostoevsky with greater clearness; it is a brilliantly successful effort to make the Russian comprehensible to the Westerner. That, in our opinion, is the

essence of the book, and it is that which makes it acceptable as a piece of literature which should endure.” (unsigned review, *Westminster Gazette* October 14, 1911)

この批評はこの作品が西欧人をしてロシア民族の不可解性、神秘性を理解させることを主眼とした小説であるかの如く解釈している。しかし作者が第一に意図したのは、あくまで青年 Razumov 個人の内部世界の葛藤、すなわち主人公の罪の意識、耐えがたい不安と孤独感、罪の償いへの心的転回と人間性の回復を描いたものである。この作品は帝政ロシアの独裁権力とこれに反抗する暴力革命運動を素材とする政治小説の外形をとりながら、実は一青年の罪とその償い (crime and atonement) をテーマとする心理小説とみるのが至当である。西欧人ならぬわれわれ日本人の読者は特にこの感を深くする。なおここで Conrad の人間の一面について若干の付言を加える。それは Conrad の Russophobia についてである。このことは先に述べたように、彼の祖国ポーランドの亡国の歴史、彼の両親が帝政ロシアの政府から受けた迫害の記憶に由来することは明かである。しかし彼は *Under Western Eyes* を創作するにあたり、芸術家として当然な impartiality, fairness, detachment の態度を保持することに最大の努力を注いだ。その努力の結果は作品のうちに十分に実現されていると私は信じる。さらにもう一つ付言するならば、彼は19世紀ロシア文学作家のうち Turgenev には芸術家として深い敬意を表しているが、Dostoevsky の人と作品には明かに嫌悪を示している。また彼はその作品の特色が Slavonic と呼ばれるのを極度に嫌い、*“I am a Pole.”* と主張してやまなかった。(昭和53. 10. 5)

Bibliography

- Baines, Jacelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography.*
- Cox, C. B. *Joseph Conrad: The Modern Imagination.*
- Crankshaw, Edward. *Joseph Conrad, some aspects of the art of the novel.*

Guerard, Albert. *Conrad the Novelist*.

ed. by Norman Sherry.

Essays of Edward Garnett and Ford Madox
Ford, in *Conrad : The Critical Heritage*,

The Works of Joseph Conrad
Dent's Collected Edition.